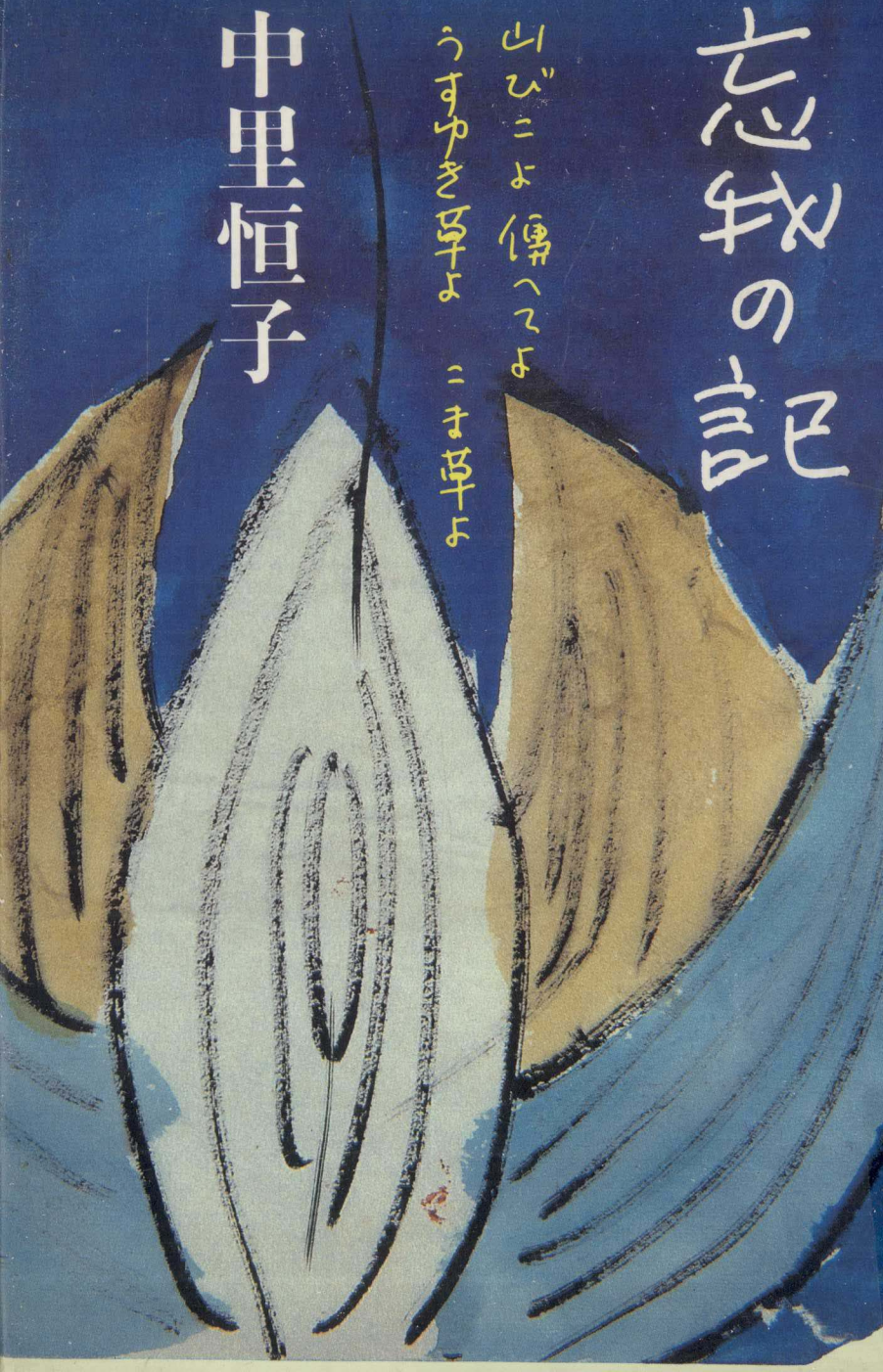


忘我の言

山びこよ 傳へてよ
うすやき草よ こは草よ

中里恒子



忘我の記

うすゆき草よ　こま草よ
うすゆき草よ　こま草よ

中里恒子

文藝春秋

ぼろが
忘我の記

昭和六十二年五月二十五日 第一刷

定 價 一 千 三 百 圓

著 者 中里恒子 なかざとつねこ
(著作権繼承者 スクリプナー圭)

發行者 西永達夫

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三―二三 郵便番號一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 大日本印刷 製本 大口製本

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

© Kei Scribner 1987

Printed in Japan

ISBN4-16-309740-6

忘我の記

山びこよ傳へてよ

うすゆき草よ こま草よ

題字
著者
裝畫
芹澤銈介
裝幀
竹內和重

一

しとしと絲のやうに雨が降るのを、硝子越しに眺めてゐるとき、空の一端が明るくなり、雲が動いていった。わたしはまた、机の前に戻つて、机上に重ねてある、小島鳥水の『日本アルプス』第二巻を開いた。

人間の記憶は、どこまで正確であるか不明だと言はれてゐる。或る種の思ひ出といふやうなもの、自分の感情感覺に合つたものだけが残し、不快なもの、覚えてゐたくないものは、忘却してしまふといふ現象が、記憶のなかに含まれてゐるのも確かだが、全然、記憶を消失してしまふことは、先づない。病的な場合をのぞいては。この山嶽と雲の表紙の繪は、なんとなく記憶にあるがと、表紙を開いたとき、……ああ、これは見た、知つてると、思ひ出した。大正の關東震災の以前に見てゐる。

見返しの、黒地に白い雷鳥と高山植物の木版刷の繪、これこれこれだ、はつきり記憶はよみがへつた。

第一巻を手にしたときは、この高山植物なかなと思つて、蝶を配した圖案を眺めただけで、久しぶりに、ペーパーナイフを使つて頁を截つてゆく楽しみを感じたが、第二巻は、ぱつと見たとき、すぐわたしの記憶はあざやかになつた。

すでにこの金文字の背の本は、うちの本の部屋にあつた。熱心に讀んだわけではない。ばらばら中味をみて、山の風景とか、高山植物とか、わたしの手の届かない場所として眺めてゐただけである。

第二巻の、富士の裾野の描寫は、むづかしさとともに親しみがあつたのは、裾野までなら、わたしにも行けるといふ可能性があつたからである。

そして奥付をたしかめた。小島烏水著。

明治四十四年七月十日前川文榮閣發行、定價は貳圓。覆刻されたのは、昭和五十年十月十四日大修館發行。日本山嶽會創立七十周年記念出版となつてゐる。

小島烏水といふ本の記憶は、小學生の頃からわたしにあつたであらう。ただ、注意して見てゐなかつた。うろ覚えである。

その後わたしにも、震災、戦災といふ身邊の變化があつて、うちの本棚にあつた本の記憶も消え、さだかではないが、何か一つのことに固執熱中する人物に、わたしが興味をもつたのは、その頃の、本の部屋から發見されたやうに思ふ。あり得ないやうなこと、達せられないやうなこと、毎日の生活とかけはなれた、必要でないやうなこと、さういふ現象、生態、に熱中し、それだけに集中する、出来る人間に好奇心を抱いた。

人が人を好きになる過程、極く些細なことに惹かれたのが原因で、何から何まで好きになつてゆく苦惱、憎愛、はては狂亂にまで至る集中力の中で、愛とか、戀とかいふ素材は、非常に人間的で乙女ごろをもそる。フアブルの『昆蟲記』を讀んだとき、わたしは、蝶蝶とんぼだけなら、追ひかけたこともあるが、ここまで細かい觀察をし、一生を通じて書き上げた人間を、氣味わるくさへ思つたものである。

わたしも、手近の動植物にはかなり興味があつて、手當り次第しらべ、集めたりしてゐるが、いづれも散漫なもので、ぢきに飽きてゐる。だが、集中的に持續出来なかつたにしても、後年、わたしが、人間をテーマに物語を書くやうになつたとき、これらの遠く、薄れた記憶が、わたしの中で次々と掘り返され、何かに熱中する、集中する、とり憑かれる、身を亡すまでも打ちこむといふ人間の生き方に、いつかはしらず、惹かれ、ひきずられて描くといふ方法に熱心になつた。記憶ばかりではなく、人間の生き方として、わたしが關心をもつたからである。

おもしろをかしいことよりも、困難な面倒なことに向つてゆく烈しさ、氣力といふものに魅力を感じたためであつた。樂に暮せることに抵抗したためではない。單純な心からで、やつと應用問題を解きあかした時のあの爽快さ、それは、樂なことよりおもしろいから、興味をもつたにすぎない。従つて、本の部屋にある、理解出来ない本も、かまはず讀んだ。讀んだものの、二行か三行でも、わたしの心のどこかに残つたとすれば、まるまる残らなくとも、そんなことを考へて讀書をしたわけではないのである。

言はば、遊びであつた。のん氣なことであつた。

わたしの仕事のなかに、遊びじみたものが漂ふとすれば、これも環境のせみであつて、齒を喰ひしばつて、何があんでもと力み返つてする習性がないのである。たとへ、さういふ方法をとつたにしても、わたしには、それを露はにしたいくない躊躇羞恥がある。こんなに、一心不亂にしたといふ意欲がみえる方が、仕事師らしいと、親方たちの職人氣質には感動もしたが、これは言はば、ものに憑かれても、餘裕ある人間の一つの習慣であらう。

本の部屋にあつた本の記憶の中で、やはり美しい本は覚えてゐた、そのひとりは、小島烏水である。

巻の一の表紙は、織田一磨作、裏白金梅、黄揚羽、淺黄斑の蝶である。

見返し圖案、鈴木錠吉、山麓の濕地に見る君影草と、アララギに、水流を配してゐる。

扉繪は、高山植物を代表するこま草、斷崖の萬年雪、偃松はなまつ。いづれも木版と思ふ。丸山晚霞作。巻末のエックスレビュリユス、白花石楠花いぐなげ模様畫・織田一磨作。

かういふ風に作られた本を、わたしは讀む前に、ばらばら眺めてゐた。巻の一よりも、巻の二の方の本の記憶が、鮮明であつたのは、前述にある通りで、わたしは、『スウイス日記』を讀むに至つて、アルピニスト、科學者として、植物を愛し、最も困難とされる高山植物の、低地培養に腐心した、辻村伊助の一途な生涯に、全く惹きつけられた。

ここにも憑かれた人間がある。女子供が、珍花に興味を抱いたのとは違ふ點が、歴然としてゐる。

『スウイス日記』は、伊助の生前に、山嶽會報などに書かれたもので、歿後、昭和四十五年八月

一日、改訂再發行された、日本嶽人全集第三回到配本、發行所日本文藝社である。

わたしが、『スウイス日記』に出會つたのも、偶然であるが、山は危険な存在として、わたしの手の届かないものとして憧憬的であつた。そこに生えてゐる植物を、實際に手折ることは不可能でも、自然の花は、その頃は箱根山でも發見、入手出來た。いづれも繊細可憐で、俗地の風雨寒暑に耐へられない。それが、高山では定植しつづける。わたしは、以前深田久彌さんから、白根葵と、うすゆき草、つまりアルプスのエーデルワイスですよと言はれて、押花を頂いたとき、登山家といふものの、何度でも山へ登る執着の一端を見たやうに思つた。

困難困苦の果に手にする美學の結晶の、なんと脆いことよ、年に一度もめぐり會へるかどうかわからない山の花園に、またも誘はれつづける。どうしても會ひたい戀びと、會へない戀びとかもしれない無垢なるものへの執着、かういふもので、人間は、自然の脅威を忘れ、自然の美しさに我をも失ひ兼ねない。

戀だけに盲目ではなく、自然の力にも盲目になれる。何千メートルの北壁であらうが、南壁であらうが、わくわくして會ひにゆくのである。とめてもとまらない逢ふ瀬をもとめてさまよふ山の魔の、冷靜な凄慘な微笑。

男が熱中出來るのは、遊びと危険である。これはわたしは眞實だと思つてゐる。

遊び？ 不謹慎不眞面目とは、ほど遠い、とらはれぬ自發的な自己の衝動によつて動く人間の形態だ。難行苦行であらうと、蝶蝶とんぼやきりぎりすであらうと自然な喜びを求める陶醉と、自我の證である。豊かな人間性の夢を追ひつめて、遂に到達したとき、その男の生涯の悉くは

崩壊してしまふ。男が追ひつづけた自然の魔力によつてである。

その散つた花を、わたしはわたしの手で拾ひあつめたい。かういふ不測の事態は、人生にはつきものである。

だから、だから何をしてでも無駄だとは、誰も思ふまい。一寸さきの闇に向つて、人は歩きつづける。我を忘れて伊助そのひとも生きた。

辻村伊助の家は、幕末から、呉服業、質屋を営んだ商家で、店は、小田原の一丁目にあつて、屋號は曾比甚と言ふ。これは辻村家が、初代甚八から、代代、甚八、または甚八郎といふ名を世襲にしたためである。

五代目の甚八の時代に、山林業に仕事を轉じたのは、折柄時代への先見の明があつた故であらう。家業は順調に、全盛期へ向つていつた。この五代目が、常助、伊助の父である。

代代の家業を轉化するといふことは、決して安全策ではない、しかし、ときに危険を冒したいのは、男ばかりではない、人間の、もつとも人間らしい欲求かもしれない。ここに忘我の根源が生じる。

この一代の轉換は、幸運にも順風に乗つて、次第に、西湘隨一の山持となつて、相模、駿河、伊豆の三ヶ國にわたつて山林を所有するやうになつた。旅に出ても、他人の土を踏まずに歩けるとまで言はれる素封家となつたのである。

呉服業、質屋といふ直接金銭の取扱ひに直面する商賣と違つて、山林といふ自然相手の仕事は、辻村家の生き方を象徴したものであつた。

ひと雨三千兩と言はれるほど、山林の育成に自然の力は大きい。甚八は、新しく山林を買ひひろげたりすると、家族を連れて旅に出た。

「どうだ、あの山の向ふも、うちの山だ、」

伊助たちの旅の楽しみは、自然への接觸であつて、幼い伊助は、山道で追ふ昆蟲や植物には清新な好奇心を誘發されていつた。

山紫水明とは言はぬまでも、自然の山水への親しみは、幼い頃から、伊助に無意識に染みこんでいつたのだ。環境がひとを育てる一つの根據にはならうか。雨水が土に吸はれ、吸はれた水が、どこへか流出するのも自然の循環作用である。

伊助は、山道を歩くのを好み、山草の花の美しい色には、子供心が震へた。じつと立ちどまつて、群生した野草を見つめてみると、この花を、誰にも知られないところに咲かせておくのは、残念だ、もつと、みんなに見せてやりたいな、ね、お父さん山の花を庭に植ゑたいよ、と言ふ。

「山の花は、山でないと咲かないだらう、」

「どうしてさ、」

「木でも花でも、やつぱり土が合はないと駄目なのだよ、伊助には伊助の家があるだらう、花だつて、花の家がきまつてる、違つた場所へ持つていつてどうかな、」

「……ぢやあ、山の土も運べばいいでせう、」

「さうだな、それが一番だが、たいへんなことだ、」

その頃の伊助の念頭には、父親の言ふたいへんの内容、つまり勞力、經濟力、學力の意味までには及ばなかつたのである。

父親の甚八も、全財産を山林に投じた進取な人物だけに、青年時代から洋行をめざし、明治二十年代に世界旅行を企畫したが、病弱の爲、實行出來ず、壯年になつてから、無斷で渡歐を試みたが、また病氣再發して、四十二歳で歿してゐる。

甚八の世界旅行の望みのなかには、その風土への憧憬が濃かつたと思へる。後年、伊助が山嶽に身を投じたのは、父への思慕と、遺志を果したい存念の結實であらう。明治十九年（一八八六年）四月二十二日生れの伊助は、一高在學中、山嶽會に入會した。

その頃から先輩友人に同行して、山行きが始つたのである。

明治三十九年（一九〇六年）、八月には木曾駒ヶ嶽、（同行者山川默）

明治四十年（一九〇七年）秋、赤城山、足尾、合潟峠、日光中禪寺、男體山、（同行者河田默、那須浩）

明治四十一年（一九〇八年）七月二十一日より三十一日、中房、有明山、燕嶽、大天井嶽、常念嶽、槍ヶ嶽、笠ヶ嶽、中尾峠、上高地、穂高嶽、（同行者川島録郎、那須浩、河田默、案内人上條嘉門治を知る）

明治四十二年（一九〇九年）七月二十四日より二十八日、上高地、槍ヶ嶽、雙六嶽、鷲羽嶽、赤嶽、黒嶽、眞砂嶽、野口五郎嶽、烏帽子嶽、濁澤、大町、（案内人、上條嘉門治）

明治四十三年（一九一〇年）七月、北安曇野、葛ノ湯、高瀬川、水俣澤、東鎌尾根出合、槍澤、上高地、（案内人、福島宗八、人夫、倉科仲十）

明治四十四年（一九一一年）六月二十四日、赤城山、（同行者、高野鷹藏）

七月十二日より八月十二日、針ノ木峠、蓮華嶽、大出、冷澤、鹿島槍ヶ嶽、爺子嶽、岩小屋澤嶽、鳴澤嶽、上高地、霞澤嶽、

明治四十五年（一九一二年）

東京帝國大學農科大學農藝化學科卒業。

伊助は、一高入學以來、毎年、日本アルプスと呼ばれる、本州中央大山系へ登つてゐる。

正に、樂しさと危険の表裏一體に、熱中してゐる青春であつた。

二十七歳で大學を出ても、自然への憧憬が、彼の美學の原點となつてゐて、音樂を愛好し、歌も詠み、いはゆる大學出の科學者と言ふ冷めたさよりも、俗世の野心もなく、生活の苦勞も考へぬ自由な生き方に終始してゐる。

辻村の家は、父の歿後、有りあまる資産を持続したわけではなかつたが、つつましい生活に不自由ない程の財産の収入はあつた。山林や土地の不動産は、右から左に自由にならないための不自由が、むしろ資産の保全に役立つてゐる。一族のなかには、甚八の甥・辻村太郎が、地質學の泰斗、東大教授、次男伊助が農學部を出て、高山植物學を専攻し、後年世界的な登山家として業績をあげたのも、父親の山林愛好と、實地教育の環境が、影響した具體的な事實であらう。

「日本アルプスは、日本アルプスとして意義があるが、歐州のアルプスは、僕の次の目標だ、獨

身のうちに、ぜひ渡歐して、科學的に山を研究したいのだ、そのくらゐの費用は出して貰へようか、」

「そのくらゐと言つても、見當がつかんよ、」

「……久野の山林を賣却したら、費用は出來ます、高山植物、山野草の研究は、必ず實體化した、辻村農園としてさ、」

「研究はいいが、商法としてはどうか、」

「とにかく生活出來ればいいぢやあないか、収入の多寡は目的ではない、親爺だつて、はたからみれば、危険な轉換をしてゐる、やりたいことをやれるといふのは、僕は、人生の最高の幸福と思ふよ、たとへ無一文の素つからかんになつても……」

伊助の澄んだ激しい眼と見つめあつてゐるとき、兄の常助も、直感した。

「やるだらうなお前なら、費用は出さう、」

「そんな決死的なことではないよ、」

「遊びにしては、ただの遊びではないからな、しかし、やる以上は方針を曲げるな、」

「わかつてる、曲げたくても、曲がらないのが僕の精神構造らしい、」

父甚八の歿後は、母歌子が、家業をまかなひ、六代の常助が助けて、梅林、山草の自然の育成を続けてゐた。伊助が、植物にかけては専門的な助言をするといふ風で、家族も雇ひ人も平穩であつた。そこへ、伊助の渡歐といふことは、かなり衝撃的なことである。

「アルプスと言へば、世界一の山ばかりではないか、若旦那のことだから、無謀なこととはなさる

まいが、どういふことが起るかわからない、」

「外國には、地震といふものはないのですか、小田原は、昔から地震が多い、言ひ傳へだけでも、ひどいものだ、若旦那には、地震のこともしらべて頂きたいよ、植物よりも、」

「地震は、地震専門の學者がゐなさらうが、あれだけ登山してゐられるのだから、そつちの方も、わからなくはあるまい、」

ちなみに、人人の懼れてゐる酒匂川地震帯には、強度の地震が起つてゐる。ことに江戸時代には、屢屢、この地帯に強度の地震があつた。その度に、小田原は震度も激しく、被害も最大であつたのだ。

慶長十九年（一六一四年）一月二十日、

被害甚大にして、人馬、多く死す。

寛永十年（一六三三年）一月二十一日、二十二日、

小田原城の石垣、樓門崩壞、天守閣また轉倒す、死者百五十人、傷者、約一千人、城主、稻場正勝重傷を負ひ、翌年歿す。餘震、一ヶ月以上に及ぶ。

元祿十六年（一七〇三年）十一月二十二日、

小田原城の石垣、樓門悉く崩壞、天守閣焼失す。城下十二ヶ所より出火、城下町の過半は倒潰、焼失す。小田原領内の死者、總合計二千三百八人、焼失家屋九千五百四十戸。

天明二年（一七八二年）七月十四日、

またも小田原城の石垣、樓門大破、天守閣東北に傾く、死傷者の記録なく、不明、破損家屋八

百戸餘。

嘉永六年（一八五三年）二月二日、

小田原城の石垣、樓門大破、餘震五十七回、死者七十九人、傷者七百餘人、家屋潰壞二千二百餘戸、土藏潰壞千四百十八戸。

五回の大地震のうち、四回も、同じ地域が倒壊してゐる。小田原城近邊は、再再、補修して、尙、また難に遭遇してゐるのであつた。

小田原土着の人人にとつて、通稱小田原地震と呼ばれる災害は、代代、語りつがれてゐるのである。

大地震發生の、江戸時代三百年間の記録を平均してみると、小田原は、六十年に一回大地震に遭遇してゐる。

天變地異に對して、人人の間に恐怖からさまざまの想像や、因縁めいたものが流布されるのは、古來からあることで、せめて、さういふ理由をつけて諦めたいのである。

小田原城主稻葉丹後守正勝の死も、重傷を受けた事實はわかつてゐても、何故、このやうな大地震が起つたのか、その原因は、人人にはわからない。すると、地震の起きた原因について、様様の風評が立つた。

その頃、伊豆三島大明神社の外に、三島さんの神木といふものがあつて、人人は、敬つてゐた。丹後守は、この木は社中ではない、我が領内にある故、恐れることなしと、切り倒してしまつた。切つた時に、木の幹から血が流れて小蛇が飛び出してきたので、人人は恐れ不安にかられ